

2003・平成15年

復習用現代語訳

柴窯さいようはかつて多くの名品を生んだ古窯こようだが、そこから出土した磁器の破片を持ってきた者がいて、数百金で買ってくれと言う。その者が「これを胃かぶとにはめれば戦闘の際に鉄砲の弾たまをよけられます。でもそれが本当かどうか、確かめる方法はありません。」と言ったので私は答えた。「どうしてそれを紐ひもにつるし、銃の鉛玉なまりだまで撃たないのだ。もしその磁片が弾をよければ砕けるはずもなく、数百金だろうと高くはない。しかしもし砕ければ、弾をよけられるという話は信用できない。数百金をくれというのは理に合わないから無理だ。」売り手は納得せず、「あなた様は芸術品の鑑定の専門家ではないし、まったく風雅を理解されない方だ。」と言って、急いで磁片をしまつて帰っていった。後で聞くと、金持ちに売って百金を手に入れたそうだ。

一般的に言つて、理にかなった方法で理想人（君子）をだますことはできても、理に合わないことでだますことは難しい。かみなりが落ちるように砲火が飛び交う中で、どうして小さな破片で弾を防げるのか。また、柴窯さいようの磁器の色調は「雨過天清・雨上がりの澄み

切った青空」と称されるが、それは 釉うわぐすりの色彩がみごとなだけであり、決して神が作ったものではなく人間が作ったものである。それなのにどうして磁器の破片がこのように不可思議な力を持つのか。

私は次のような『旧瓦硯の歌』きゅうがげんを作ったことがある。

銅雀台どうじやへくはすでに崩れ、何も残っていないのに、どうして当時の瓦かわらがこのようにたくさん残っているのか（「銅雀台の瓦から作った」と称する硯すずりはほとんど偽物だ）。文人ぶんじんはたいてい珍しい物を好む癖がある。だから偽物だわかっていてもとりあえず自分の心をごまかすのだ。

柴窯さいようの磁器の破片もまたこれと同じに違いない。※（偽物だ！だから「研究するには、事実にもとづいた検証と合理的な判断を重んじる態度が必要であり、権威に追従したり流行に左右されたりしてはならない。」問6⑤）と紀昀（1724-1805）は主張し、空理空論に陥っていた当時の朱子学を批判した。

### 訳注

1 原文6行目の「君子へ」は主語でなく、目的語。「主語」「目的語」などの文法用語はヨーロッパ諸語を説明するための用語に過ぎず、

中国語を説明するには不適切な点もあるので、受験レベルでは文法を気にしない方がよい。

2 乃ち…それなのに、かえって。

音読用書き下し文

客有り柴窯の片磁を携へ、数百金を索めて云ふ、「胃に嵌むれば、陣に臨んで以て火器を辟くべし。然れども確たるや否やを知るに由無し。」と。余曰はく、「何ぞ縄もて此の物を懸け、銃を以て鉛丸を発して之を撃たざる。如し果たして火を辟くれば、必ず砕けず、価数百金なるも多しと為さず。如し砕くれば、火を辟くるの説確たらず、理として価数百金を索むる能はざるなり。」と。鬻ぐ者肯ぜずして曰はく、「公賞鑑に於て当行に非ず、殊に殺風景なり。」と。急ぎ之を懐にして去る。後貴家に鬻ぎ、竟に百金を得たりと聞く。

夫れ君子は欺くに其の方を以てすべきも、罔ふるに其の道に非ざるを以てし難し。砲火の横衝すること、雷霆の下撃するが如きに、豈に区区たる片瓦の能く禦ぐ所ならんや。且つ雨過天清は、釉色の精妙なるものに過ぎざるのみ。究に人造に由り、神功に出づるに非ず。何ぞ断裂の余、尚ほ靈なること是くの如きもの有らんや。余旧瓦硯の歌を作りて云ふ有り、

銅雀台の址どじやくたい類あどくすれて遺のこす無なし 何なんぞ乃すなわち剩じようが瓦がの多かきこと斯ごとくの如ごとくならんや

文士ぶんし例しおおむね奇くせを好こころむの癖そ有り 心もうに其しばらの妄みずかなるを知るも姑みずかく自ら

欺あざむくなり

柴片さいへんも亦また此この類たぐいなるのみ。

### 解説 【主張をつかむ】

ステップ1 最初の2行を見る

説明・注に答えあり p152。注1を使って、傍線Aの前まで読む。

「紫窯（磁器の名品を産んだ古い釜注1）の一片の磁器（注1）を携え、数百金をもとめて…」

ステップ2 最後の3行を見る

オシリから 読むとわかるよ お結論㍁

結論は最後に来るので、うしろからながめて最後は次のとおり。

12行目「紫窯の片磁もまたこの類のなる而已み」p136

早読みは 最初と最後に 主語述語㍁

楽をするため最後3行の最初だけ読む。

10行目「銅雀台のあと、くずれてのこすなし」

説明・注に答えあり p152なので注9の説明を見る。

「(銅雀台)の瓦かわらを用いて作った硯すずりがもてはやされた」

### ステップ3 最終設問の選択肢を見る

共通の言葉を探すと次のとおり。

1・12行 古い紫窯注1の片磁

②⑤ 文物ぶんぶつ(骨董品)

注9 昔の硯すずり  
注9

時間節約のため、選択肢の最初と最後だけを見ると、

②「伝統の継承 費用を惜しむな」

⑤「古い文物の研究 流行に左右されるな」

このどちらかが筆者の主張だろう。これで十分。これが大事。ここで退却。

問2 A窺うかが 傍線Aの「確否」は「在ありや不いなや…あるか、そうでないか」

疑問 かと同じように「確かくたるや否いなや(不十口〓否)」と読み、「確かか、そうでないか」の意味。

傍線Aの直前は「片磁を胃にはめると)火器を避さくべし」。

器」は「銃・鉛丸」2行目「砲」6行目と類推できるので、「片磁を胃に

はめると銃砲の弾丸を避けることができる。しかれども<sup>A</sup>無由知確かか、  
そうでないか。」となっている。

あとは理屈から考えて、「鉄砲の弾をさけることができる。しかしそれが、確かかどうかは

わからない。知るのに理由（根拠）無し

↓確たるや否やを知るに由なし」となって②を正解とするしかない。私はこの訓読に時間がかかった。不覚！

なお、原文の「由」は「經由」の「由」で、「(ものごと)を処理する時に經由する」手段・方法」の意味だが、「理由・根拠」と解しても正解には至る。

問3(疑?) 疑問 p.72 「何不<sup>なんぞ</sup>二<sup>に</sup>一<sup>一</sup>…どうして〜しないのか？」だから、

②か③。銃弾で撃つのが②「冑」か③「磁器の破片(片磁)」かは、直後の「如し<sup>も</sup> p.130 果たして火器を辟<sup>さ</sup>くれば、必ず砕けず、価<sup>あた</sup>数百万なるも多しと為<sup>な</sup>さず」から、代金として数百万金を「索<sup>もと</sup>め」<sup>行目</sup>られている「片磁」を撃つとわかるので、③が正解。

問4(主張漢注) 「理由」を問われているので傍線Cの直前から理由を見つけようとするがよくわからない。そこでしかたなく後ろを見始めると、次の段落の最初が「夫れ<sup>そ</sup>…そもそも…」<sup>p.130</sup>で始まる一般論・結論・主張なので、ここが重要ポイントとわかる。そして「説明・注で正解つかめ!」<sup>p.152</sup>により、注4を見ると「理にかなった方法」とあ

り、「理」を熟語にすると「真理」であり、その反対は「虚偽」。そこで虚偽の同義語「嘘」<sup>うそ</sup>を含む⑤が正解、かな？

確認のために6行目を訳すと、「そもそも君子（理想の人）は欺くのに理にかなった方法をもつてすることができない」であり、その反対は「君子は（真理でない）嘘で欺くことができない」となり、筆者（紀昀<sup>きいん</sup>）が君子だとすれば、⑤「嘘が通用する相手ではない」ところになる。

紀昀が自ら「自分は君子だ」と言うわけではないが、「片磁を買わなかった紀昀＝理に合わない行動はしない君子」でなければ全体の論理が成り立たないので、やはり⑤の正解はゆるがない。

なお、傍線Cの直前「公<sup>あなたは</sup>賞鑑<sup>鑑賞</sup>において専門家<sup>注</sup>にあらず

…殺風景（風雅を理解しない人）なり」を見ると、①「骨董を見る目がない」か③「風雅を理解しない」を正解にするはず。しかし出題者は常に論理・結論を君たちに聞きたいのであり、そのために結論の「夫れ<sup>そ</sup>…」の所にわざわざ注4を用意して君たちを誘導している。したがって、出題者が「解釈」し、「意図」する正解は⑤なのだ。

自由な解釈を求める君は怒るかも知れない。しかし、夫れ試験そもてしとは出題者との戦いであり、戦闘において敵の心理・行動を読むことは勝利への第一歩ナリ。

問2 D 対比 「論文は対比に注意！」「夫れ」そ以下は論文の結論であり、一文が次のような対比（対句ついく）になっている。

X 可能 欺 以 「其方注ト理」

⇕ ⇕ ⇕

Y 困難 罔注ト 以 「非其道理」

したがってXが「其方」を以てすべし」なのでYも「非其道」を以てし難し」であり、③が正解。

論理の対比で見れば実にシンプルだが、返り点で見ると私も頭が痛くなる。

問1 A 〔於〕 拙著 p19 で説明しておいたことわざ「出藍しゅつらんの誉れほま」（生徒が先生より出世すること）を知らないと解けない。「神功に出づる」は「神功から出る」の意味。「出藍しゅつらん」も「藍から出る」の意味。したがって②が正解。なお他の選択肢は次のとおり。①「帆ほを出だす」

③「師（軍隊）を出だす」⑤「資（金）を出だす」④「出奔しゅっぺん…出で奔る」



問1イ熟 「断裂の余」は「片磁（磁器の破片）」だから、「何かの物の余り」。この意味で熟語にすると「残余…何かの物の残り、残り物」。「余り」だけでは選択肢は絞れないが、「余」を「残」に代えて訳せるのは④「余熱…残っている熱」しかない。残りの選択肢は次のとおり。

①「余裕…余<sub>レ</sub>裕…幅が十分にある」⑤「余暇…余<sub>レ</sub>暇…幅が十分にある時間」②「余念…余念なく<sub>レ</sub>他<sub>レ</sub>の事を考えず、集中して」③「余人…余人をもつて代えがたい<sub>レ</sub>他<sub>レ</sub>の人にはできない、これができるのはあなただけだ」

問5〔3〕押韻 p158 の問題なので偶数句末の子音を見るが、「斯」の音読みがわからない。そこでしかたがないので第一句と第三句の句末を見ると、「遺*i*」と「癖*heki*」。漢詩の押韻とは句末の音をそろえるのだから、空欄に入るのも「だ」と推定すれば、正解は④「欺*gi*」しかない。あとは①「愉*yu*」②「娛*go*」③「詐*sa*」⑤「虚*kyo*」。

「*i*」は母音じゃないの？押韻は子音をそろえるんじゃないの？と疑問に思う人もいるかもしれないが、中国語の子音・母音は日本語と範囲が違うので小さなことは気にしない。また、本当のことを言うとして「癖*heki*」は押韻にならないのだが、小さなことは気にしない。

なお斯の音読みは「シ*si*」だが、知る受験生はいないだろう。実は「斯文しぶん・儒教の学問」という言葉があり、孔子思想の継承運動をしている「斯文会しぶんかい」という団体が東京の湯島にある。

①の正解が④とわかると訓読は「しばらく自ら欺く」なので、②の正解は「とりあえず自分の心をごまかす」①となる。

問6主張注 二つのステップでつかんだ正解候補は②「伝統の継承費用を惜しむな」と⑤「古い文物の研究 流行に左右されるな」。「最初と最後に筆者は主張」により最後を見るが、「柴片さいぺんもまたこの類なるのみ」ではまったくわからない。そこで結論がわりの漢詩の注9の「最後」を見ると、「もてはやされた」とある。「一時的にもてはやされる」のだから、⑤「流行に左右」と同じ意味。また⑤「検証」は2行目の「確否」にあたり、⑤「合理的な判断」は注4の「理にかなった」にあたるので、⑤が正解。

②は「費用を惜しむな」がキズ。第一段落で筆者は数百金を払わなかった。

原文でなく注から⑤を正解とするのは乱暴に見えるかもしれない。しかしどの国の古典学も、新しい創作ではなく古いものの「注釈」が研究の基本となる。中国古典もその例外ではない。そして漢文の

試験も亦此類またこノるいナルのみ而已矣！だから注だけから正解を導いても不思議ではない。むしろこれこそ漢学の伝統なのだ。君たちには想像もつかないだろうが、「説明・注で正解つかめ！」p.152なのだから、着目すべきは注、注、チュウー！